

●アーティスト名：関口 恒男 ●設置場所：福用駅エリア

●タイトル：「福用レインボーハット」

●プラン：水の中に鏡を入れ、太陽の光を反射することによって虹を作り、木の枝などで作った質素なハット（HUT= 小屋）の内部に投影。原始人たちが火を囲んで踊っていたように、虹をよりどころとして人々が集い、共に遊び学ぶ場を作る。



<制作風景>

【見どころ】骨組みに使われているのは、新潟などの豪雪地帯に生えていた木。雪の重みで曲がりくねった形を利用して不思議なハット（小屋）が関口氏の手により生まれていきます。接着剤も、焼いた陶器の破片とボンドを混ぜたもので、できるだけ自然のものを使っています。時間が止まったような、太古の空気が流れているような、心地よいハットの中では会期中は焚き火も！ヒトとしての本能が呼び覚まされていくような不思議な感覚になる作品です。

●アーティスト名：さとうりさ ●設置場所：抜里駅 駅舎

●タイトル：「地蔵まえ 3 （サトゴシガン）」

●プラン：「パブリックアートもお地蔵さんのように地域に馴染むのは可能か」というテーマで3回目の参加となる今年は、ご家庭でオブジェ作品を預かってもらうプロジェクト「サトゴシガン（里子志願）」を20年ぶりに実施。果たしてパブリックとプライベートの境界線はどこに？



【見どころ】会期が始まる前までに8組のおうちに「サトゴ」に出されていた作品。様々なご家庭で過ごすことで、「おにんぎょさん」「おもちゃちゃん」など様々な名前をいただき、可愛がられてきました。会期中には「作品」として展示されることで、作品に付着してきた「愛着」がどんな変化をもたらすのか。美術家さとうりさが表現の根源で持ち続ける問いをぶつけてくれた渾身の作品です。

●アーティスト名：木村 健世 ●設置場所：抜里駅・駿河徳山駅・福用駅

●タイトル：「無人駅文庫 抜里」

●プラン：駅に佇む、人々によって紡がれた数々のストーリーを文庫目録に収録。無人駅という場を、様々な時代・様々なストーリーと重ねて体験したときにあなたの目の前にはどんな風景が広がるだろうか。抜里編に加えて過去に作られた2作品（福用編、駿河徳山編）も同時に展示。

※文庫目録は無料でお持ち帰りできます。



<過去作品>

【見どころ】新作として「抜里駅」にまつわる様々な人の思い出を取材し、文庫目録として1冊にまとめています。今回は抜里から遠く愛媛にまで物語の収集が及んでいます。ページをめくれば、きっとあなた自身のことかと思うような懐かしくて新しい物語にきっと出会えます。

●アーティスト名：ヒデミニシダ ●設置場所：抜里駅エリア

●タイトル：「境界のあそび場／うかぶ縁側」

●プラン：大井川流域の地域では、対岸との人の行き来、物資の運搬、情報の伝達といったことに様々な工夫がされてきた。吊り橋をかけたり、ロープを渡したり、山の上から遠くへ目を凝らしたり。こうした「彼方への意識」を楽しむ場として、茶畑の上空に立ち上がった大きな縁側を立ち上げる。ゆっくりと、どこか彼方を眺めてみる時間を提供する。



<作品イメージ>

【見どころ】下見の際から「伝令」ということがキーワードとしてあったニシダさん。大井川を挟んで、情報やもの、人を運ぶといった伝達が様々に工夫され行われてきた様子を感じ取っていました。今回、茶畑の中に大きな縁側を浮かび上がらせることで、普段は見ることのできない特別な風景を味わいながら「彼方」を感じ取る空間を創り出します。

●アーティスト名：栗原亜也子 ●設置場所：塩郷駅エリア

●タイトル：「かみさまたちのまちじかん」

●プラン：塩郷駅から吊り橋をわたり、久野脇の坂道をのぼって佐澤薬師堂から眺めることができる。大井川の「神の瀬（かんのせ）」。神無月に出雲に向かう神様が待ち合わせした場所だという。“もし、かみさまたちがその待ち時間に現代のボードゲームに興じていたら”という想像のもと、久野脇エリアや駅の待合室に「あそびの痕跡」をつくる。



<作品イメージ>

【見どころ】久野脇地区、佐澤薬師堂から見える大井川と山の境のような場所を「神の瀬（かんのせ）」と今も地域の人は読んでいます。10月に出雲に向かう神様たちの待ち合わせ場所と呼ばれている「神の瀬」を基に、かみさまたちのためのオセロゲームを出現させます。久野脇親水公園キャンプ場に表現する巨大オセロは、茶殻や古新聞、牛乳パックを地元の方にいただいて和紙で制作。会期中に公開制作を行いながら、マスを埋めていきます。

●アーティスト名：江頭 誠 ●設置場所：抜里駅エリア（ぬくりプラザ）

●タイトル：「間にあるもの」

●プラン：旅先で現地の方から”もの”をいただくと、家に帰ってその人のことを思い出しながら、その”もの”を愛でることがよくある。また道端に落ちている”もの”を見つけたときも、その”もの”がそこにある経緯や、”もの”の背景にいる誰かを想像する。誰かと自分の間に”もの”があることで、新たなコミュニケーションが生まれるきっかけを作る。



<作品イメージ>

【見どころ】様々なものを懐かしさを感じる花柄毛布で包んでいく江頭誠氏。今回は動く先品に初挑戦します。昨年の参加時から、「このエリアの一番の魅力は暖かな人だ」と言って」いた江頭さん。そんな集落の人と共に作品を完成させていきます。茶業や畑仕事の際のユニフォーム（服装）が作品に！会期中は地元の人達が江頭作品を身に付けて集落を歩きます。

●アーティスト名：北川 貴好 ●設置場所：抜里駅エリア・せんべや

●タイトル：「茶屋せんべや」

●プラン：駄菓子屋、鋳型工場という経緯を経た元工場。

地元の人には今も「せんべや（せんべいや）」と呼ばれるこの場所で、せんべいやの記憶から集落の人の将来についてもインタビューし、人々の思いが「せんべや」というモチーフを中心に広がっていくインスタレーションを制作。



<過去作品>

【見どころ】抜里エリアの人が、今も「せんべや」と呼ぶお宅のみなさんにインタビューをし、そこから生まれたイメージを表現していきます。巨人と集落の景色、人との融合と、茶屋せんべやとしての機能を、会期中はバーカウンターとして復活させます。コロナなどいろいろあるけれど、かつてのせんべやのような地元の人々の語らいの場の復活を目指します。

●アーティスト名：夏池篤 ●設置場所：福用駅（駅舎）

●タイトル：「暖まっていきなよ！」

●プラン：エアコンの冷媒管を使って酩酊状態にある人物を形作り大井川鉄道のベンチに配したもの。暖房運転中のエアコンは、吹き出し口から出る暖気と、加熱された冷媒管により周囲を温める。この芸術祭を見学に来られた方にアート作品として展示すると同時にホットなサービスを提供する作品。



<過去作品>

【見どころ】電飾などを扱うことを得意とする夏池篤氏の作品は、今回は来てくれた人が温まれる場所としても機能します。無人駅は春先までなかなか寒い場所。そんな場所をエアコンの冷媒管から生み出された「酩酊状態の人物」があたためてくれます。お酒好きな人、自分のことかも！？と思うのでは？

●アーティスト名：中村昌司 ●設置場所：神尾駅

●タイトル：「黒いオッパイ」

●プラン：かつてこの大井川すじに1万人を越える朝鮮の人たちが働いていたという。ダムの建設から発電所の工事、鉄道の敷設など危険をともなう工事によって多くの義性者も出た。黒いオッパイドームの中の赤い船に乗り彼らのことに思いを馳せる。



<過去作品>

【見どころ】昨年も神尾駅で作品発表くださった中村昌司氏の今回は「黒いオッパイ」という作品。電源開発のために多くの労働者が働いていましたが、朝鮮から来た人も多く含まれるそうです。取材をしながら当時の様子を聞き取り、危険にさらされながら懸命に働いたかつての人々を想う空間を出現させます。

●アーティスト名：形狩り衆 ●設置場所：塩郷エリア（久野脇地区）

●タイトル：「顔の家」

●プラン：「顔の家」は、この地域に住む人々が互いを愛しみ、「ライフマスク」をその唯一無二の存在証明として永遠に残そうとするもの。ワークショップで、お互いの顔から石膏で型を取り、出来上がった「ライフマスク」を集めて「顔の家」に保管し芸術祭会期中には一般に向けて公開展示する。



<制作風景>

【見どころ】型取りは、参加者たちが自らで相手のものを。このことにより、その人の存在する確かな証を感じ、感謝や慈しみの気持ちが生まれていきます。誰もがいつかは这个世界から消えていきますが、「ライフマスク」として型取りの時間と、そこで生まれた温かな感情を永遠に残していく試みです。

●アーティスト名：クロダユキ ●設置場所：塩郷駅エリア（佐澤薬師堂）

●タイトル：「記憶の気配」

●プラン：六十年毎、庚子年に行われる大祭をきっかけに、この地にひよんどりが復活した。大祭もひよんどりも、その真を知るものはいるのだろうか。記憶は変容し、また別の記憶を成してゆく。水のように移ろい、重なり、剥がれ、薄らいでゆく。一つの集落の記憶を、薬師の泉に映す。



<過去作品>

【見どころ】60年に一度の大祭を終えたばかりの佐澤薬師堂。風習を受け継いでいくのは、とても難しいこと。記憶は常に変容しうつろっていく、佐澤薬師堂に出現させた小さな泉を使って表現。

●アーティスト名：カトウマキ ●設置場所：代官町駅・塩郷駅 駅舎

●タイトル：「ここで、咲く。」

●プラン：観賞用に導入されたヒメジョオンは、いつしか雑草化し、鉄道の線路沿いに広がっていったそうだ。きっとこの大井川鉄道にも、白く小さな花をいくつも咲かせたであろう。しかし、今では我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれがあるとも言われている。今回、何も言わず全てを受け入れていくヒメジョオンに寄り添って制作する。



<過去作品>

【見どころ】ヒメジョオンはいつしか人々に忘れ去られ、雑草に。「鉄道草」とも呼ばれる。鑑賞用と喜ばれようが、雑草として嫌われようが、お構いなしに楚々と咲き続けるヒメジョオンを来場者に発見してもらおう気持ちで表現していきます。

●アーティスト名：常葉大学造形学部 ●設置場所：抜里駅エリア（ぬくりプラザ）

●タイトル：「星空のSL」

●プラン：川根地区だからこそ見ることができる満天の星を数多くの灯籠で表し、上部では大井川鉄道のシンボルであるSLがこれから先も走り続けてほしいという願いを込めて駆け上がる様子を表現。水面に灯籠の明かりとSLを映すことでより幻想的な世界を演出。



【見どころ】昨年、運営サポーターとしてお手伝いくださった常葉大学造形学部夏池ゼミ生のみなさん。昨年の閉幕時には、アーティストとの交流や表現に感化され、「私達も挑戦したい！」をオファーをいただき今回の展示が実現。若い感性でどんな風に無人駅エリアを感じているのか必見です。